

# 房総における東北系土師器について

木島桂子

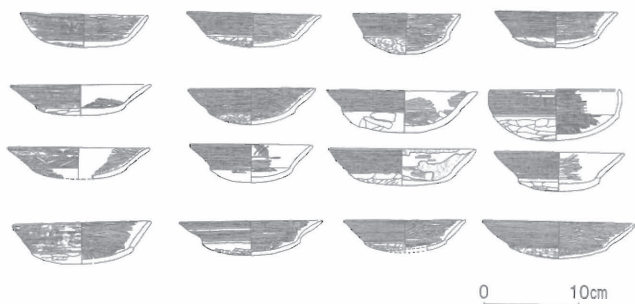
## 1. はじめに

古墳時代後期の鬼高式土器が定着する6世紀から律令体制へと移行する7世紀は、九十九里地域が畿内政権の東北経営の拠点という意味あいのある地域であるということは従来から指摘されており、この地域からいわゆる東北系と呼ばれる土師器が出土していることも考古学的に示されている。

陸奥国を中心とした地域に、7世紀を主体とした関東系の土師器が広く分布している。これは、律令制拡大に必要な施設の設置に伴い房総をはじめ、関東各地から移住した人々(柵戸)による産物である。このように、両地域間の人の動きによる影響が土器にみられるのである。

東北系の土師器と呼ばれる杯が、これまで九十九里地域周辺に限定して出土しているといわれてきたが、有吉北貝塚の報告書の中で岸本氏が指摘したように分布が九十九里地域に限定されていないことがわかってきた。そこで今回は、管見に触れた県内のいわゆる東北系土師器と呼ばれる土師器杯を集成し、3つの点に着目して整理してみたい。

まず、房総半島のどの地域から出土しているのか。次に時期的な変遷はどうか。最後にこの異系統の土師器は、東北地方の栗罎式土器の影響を受けたといわれているが、全てがそれにあたるのだろうか。以上の3点である。



第1図 栗罎式土器

## 2. 栗罎式土器と房総の東北系土器の特徴

栗罎式土器は宮城県仙台市西中田7丁目に所在する栗遺跡が標識遺跡となっている土師器である。特徴は、①口縁が内湾しながら逆ハの字に開き体部下半が鋭く張り出し、明瞭な稜を持つ。②内黒(炭素吸着)を主体とする。③口縁部の最終調整は、ヨコナデである。④体部外面はヘラケズリ後ヘラナデは施しているが、ヘラミガキは行っていない。(第1図)

房総の東北系土器の特徴は、①口縁が内湾しながら高く立ち上がり、体部(底部)が小さい。その境には稜を有しているが、明瞭に作り出しているものとほとんど張り出しのないものがある。②内外面黒色処理である。(分析によるものばかりではないが、漆仕上げであるものが目立つ)③内外面最終調整は丁寧なヘラミガキである。

## 3. 房総における東北系土器出土遺跡

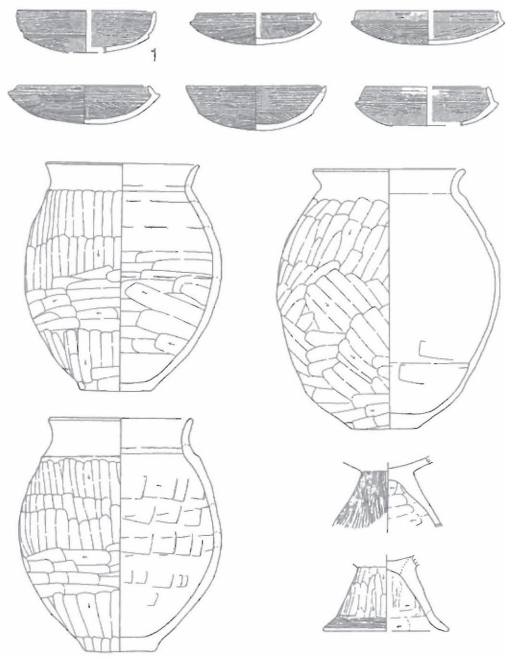
以上のような特徴を持つ東北系土器が出土している房総の主要な遺跡を概観してみる。尚、図中の東北系土師器は番号を付している。

### 1) 東金市久我台遺跡(第3図)

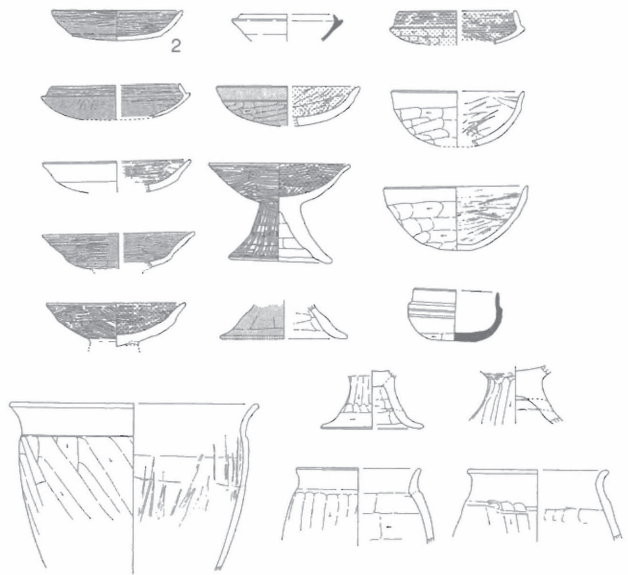
東金市松之郷字久我台に所在する。遺跡は房総半島の東側上総丘陵上にあり、標高60m前後を測る。九十九里海岸平野から70mほど西側に入っており、東・北・南の三方を開析された舌状台地の西半部を占めている。本遺跡は縄文時代早期前半以降、断続的な生活の場として使用されていたことは、遺構の検出のないものの、遺物の存在で想像される。しかし、中心となるのは古墳時代から平安時代の集落である。古墳時代後半から平安時代中頃までの住居跡が278軒検出されている。6世紀中葉を集落の形成開始時期とし、継続して生活が営まれ、6世紀後半から7世紀後半にかけて一つのピークを迎え、その後集落規模が減少し、8世紀第3四半期に再びピークを迎え、10世紀か



第2図 東北系土師器分布図



SI-133 出土遺物



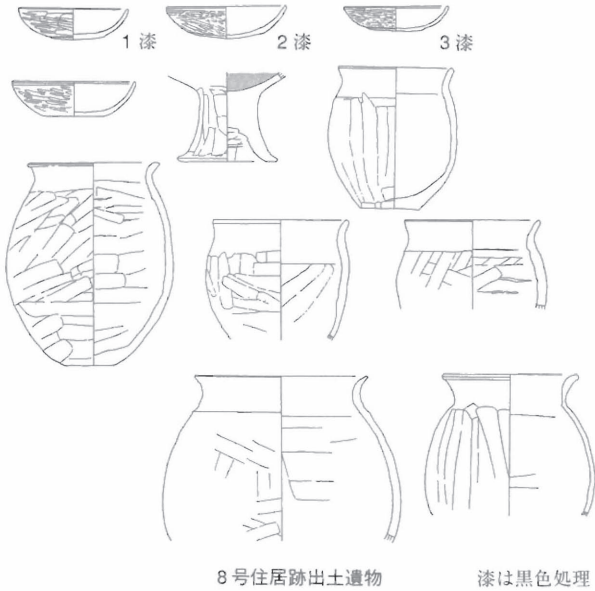
SI-168 出土遺物



網かけは黒色処理 以下同じ

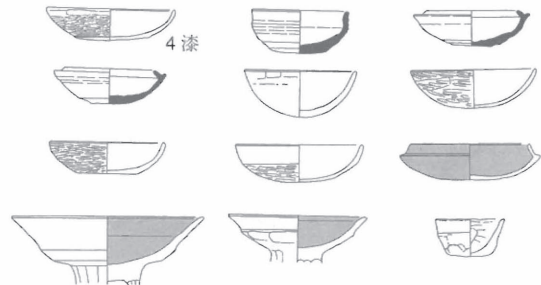
3. SI-114 4. SI-115 5~10. SI-116 11. SI-215

第3図 東金市久我台遺跡 住居跡出土東北系土師器

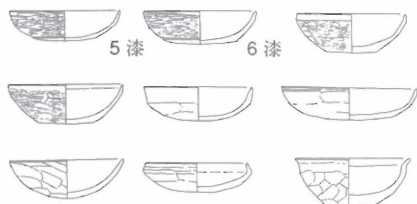


8号住居跡出土遺物

漆は黒色処理



13号住居跡出土遺物



19土坑出土遺物



7. SI-023 8.9. SI-027 10. SI-039

0 10cm

第4図 栗焼棒遺跡出土 東北系土師器



ら11世紀にかけて終息している。

東北系土器は、6軒の竪穴住居から合計11点出土しているが、古墳時代Ⅱ期とされる6世紀後半から7世紀前半に限定される。

### 2) 山武町栗焼棒遺跡 (第4図)

山武郡山武町矢部字日向487-1に所在する。作田川中流北岸の標高45mから50mの台地上に位置している。九十九里平野に向かっていくつもの中小河川が流れ、それに伴い小支谷が複雑に形成され、分断された各台地上には前方後円墳を中心に、有力な古墳がいくつも分布していることは周知のことである。本遺跡に関わる古墳は、同じ台地上に存在する「駄ノ塚古墳」である。報告によるとTK209とされる土器の出土から7世紀初頭にと考えられている。

本遺跡からは、4か所の旧石器集中地点と縄文の時代の土坑14基などを検出しているが、中心は古墳時代後期で、50軒の竪穴住居跡等が検出されている。東北系土器は6軒の竪穴住居から合計10点出土しているが、すべて7世紀前半に限定される。

### 3) 中永谷遺跡 (第5図)

市原市草刈字中永谷1,762他に所在する。下総台地を開折する村田川の河口から約5～6km上流の右岸に形成されている草刈台地の北辺に位置している。台地の標高は25～30mである。本遺跡は旧石器時代に属する石器群が9か所検出されたが、中心となるのは

古墳時代後期の128軒の竪穴住居跡である。遺跡の開始は、5世紀の中葉から後葉と考えられ、6世紀の前葉から後葉にかけてピークを迎える。そして6世紀の末葉から7世紀の初頭まで営まれた集落である。

東北系土器は、5軒の竪穴住居から合計6点出土している。その内訳は、6世紀後半が2点、7世紀前半が4点となる。

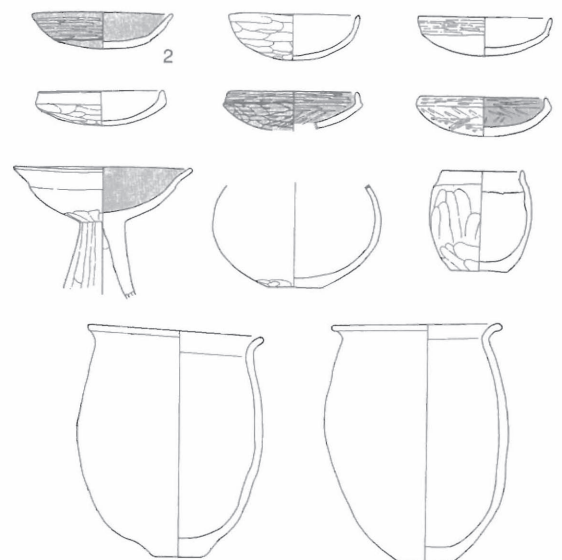
### 4) 千葉市有吉北貝塚 (第6図)

千葉市緑区有吉町他に所在する。現在のJR外房線鎌取駅から南西300mに位置している。本遺跡の立地する台地は、村田川や村田川の北側で千葉市の中心を流れている都川などに注ぐ大小の谷より樹枝状に開折されている。村田川右岸域に形成された小支谷の内、赤塚支谷に突出した標高38mの台地である。有吉北貝塚は縄文中期の大規模貝塚として貴重な資料が数多く提示されている。しかし、本遺跡は古墳時代から近世までの遺構も検出されている複合遺跡である。

本遺跡から検出された古墳時代の竪穴住居は108軒で、時期の判断できるものは99軒であった。6世紀代は、49軒中、前葉6軒、中葉10件、後葉33軒である。7世紀は、45軒中、前葉19軒、中葉11軒、後葉15軒であり、8世紀代は、4軒で前葉2件、不明2軒であり、6世紀後半から7世紀前半にピークがあることが明らかである。東北系土器は、集落のピークの時期に、7軒の竪穴住居から合計7点出土している。



100号住居跡出土遺物

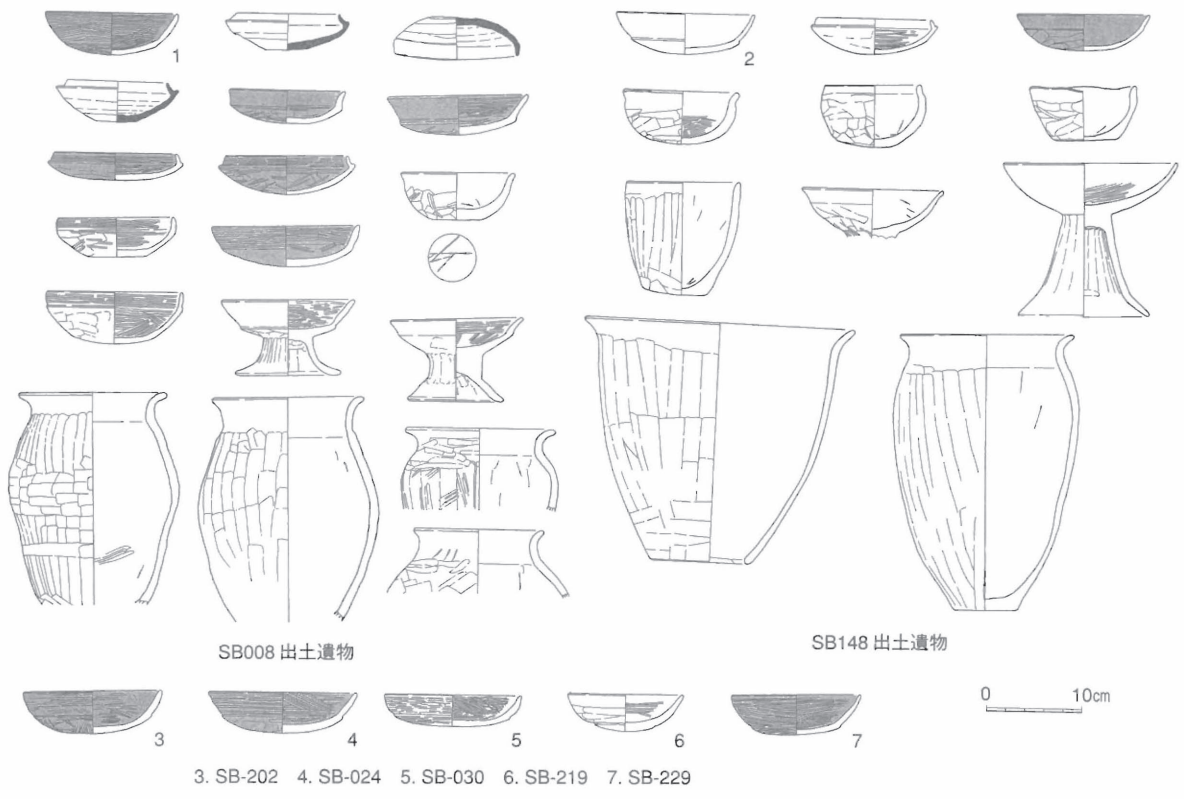


126号住居跡出土遺物

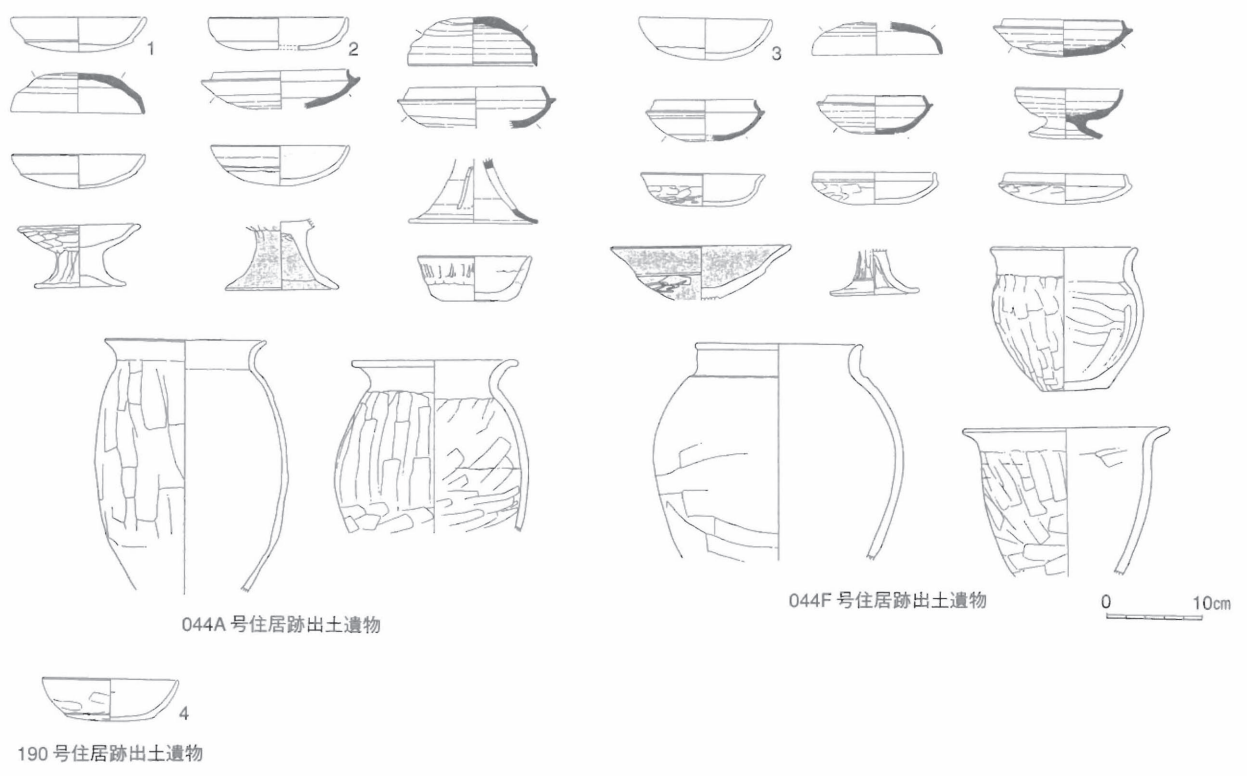


3. SI-063 4. SI-064 5.6. SI-112

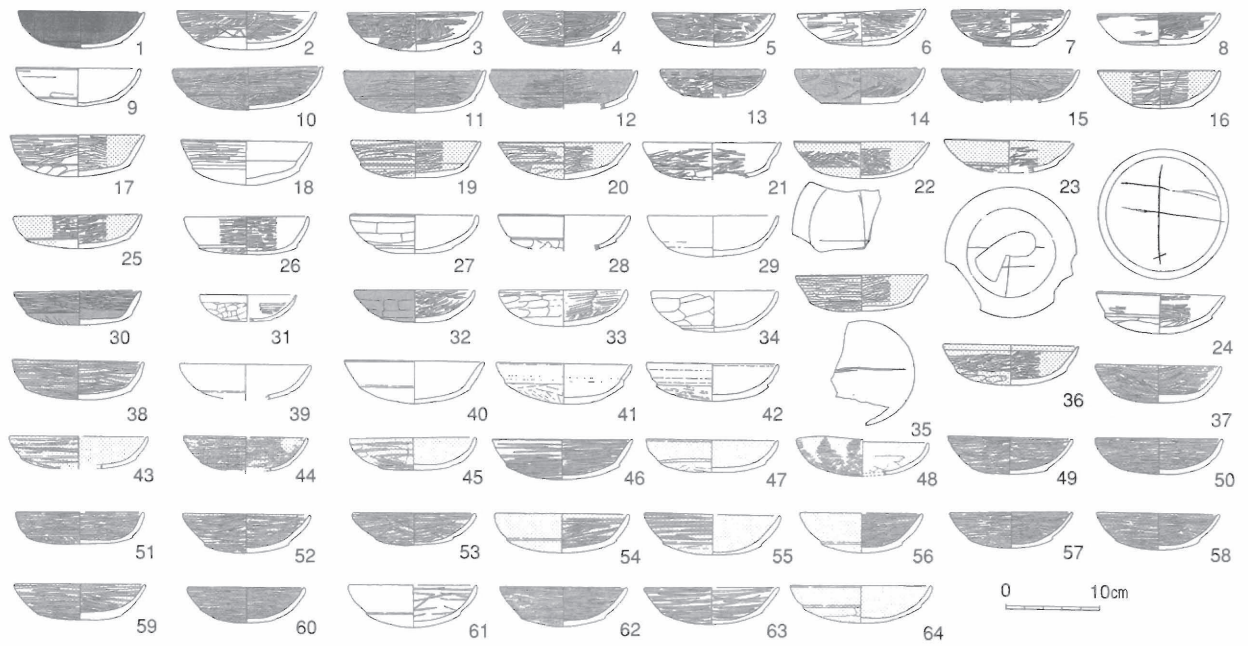
第5図 中永谷遺跡 住居跡出土東北系土器



第6図 千葉市有吉北貝塚 住居跡出土東北系土師器



第7図 榎作遺跡 住居跡出土東北系土師器



1 作畑2住	2 椎木台 VIE003	3 椎木台 VIE003	4 椎木台 VIE053	5 東金黒田 VE007	6 東金黒田 VE007	7 東金黒田 VE019	8 小油井台 IXD001
9 小油井台 IXB019	10 大山 SI-017	11 大山 SI-017	12 大山 SI-017	13 大山 SI-037	14 大山 SI-068	15 大山 SI-069	16 一本松 H-054
17 猪ヶ谷024住	18 猪ヶ谷024住	19 猪ヶ谷024住	20 猪ヶ谷028住	21 宮山 H-28	22 宮山 H-62	23 宮山 H-62	24 宮山 H-62
25 道門坊017住	26 道門坊019住	27 南前野 H-135	28 南前野 H-135	29 清水 Na1-8住	30 東滝台121住	31 宮山 H-069	32 宮山 H-062
30 油井古塚原 H-012	31 油井古塚原1住	32 東滝台049住	33 東滝台061住	34 東滝台121住	35 宮山 H-069	36 宮山 H-062	37 御田台029住
38 御田台029住	39 有吉二次191住	40 有吉二次195住	41 椎名崎075住	42 椎名崎076住	43 草刈 C区 A号墳	44 草刈 C区5号墳	45 草刈 E区049住
43 春日作017住	44 春日作017住	45 伯父名台048住	46 伯父名台067住	47 草刈 C区 A号墳	48 草刈 C区5号墳	49 草刈 E区049住	50 草刈 E区157住
51 草刈 E区157住	52 川焼台036住	53 川焼台036住	54 川焼台128住	55 川焼台128住	56 川焼台394住	57 川焼台394住	58 川焼台394住
59 川焼台415住	60 川焼台433住	61 川焼台433住	62 川焼台611住	63 城ノ台058住	64 城ノ台283住		

第8図

表1. 東北系土師器の出土遺跡と時期

No		6世紀			7世紀			8世紀			合計	備考
		前	中	後	前	中	後	前	中	後		
1	東金市久我台遺跡			3	8						11	
2	栗焼棒遺跡				10						10	
3	千原台ニュータウン IV中永谷遺跡			2	4						5	
4	東南部ニュータウン20有吉北貝塚2 (古墳時代以降)			4	3						7	
5	千葉市榎作遺跡			3	1						4	
6	作田遺跡			1							1	
7	東金台遺跡群			1	1		1				3	
8	椎木台遺跡						2	1			3	
9	東金黒田遺跡						1				2	
10	小油井台遺跡			1					1		6	
11	大山遺跡			5							1	
12	大網山台遺跡群				1						4	
13	一本松遺跡				4						3	
14	猪ヶ崎遺跡				3	3					2	
15	宮山遺跡			1	1						1	
16	道門坊遺跡				1	1					2	
17	南前野遺跡										1	
18	清水台Na1遺跡			1							2	
19	油井古塚原遺跡					2					1	
20	滝東台遺跡			1		1	1				3	
21	御田台遺跡				2						2	
22	東南部ニュータウン 5有吉二次遺跡					2					2	
23	東南部ニュータウン 6椎名崎遺跡					1	1				2	
24	東南部ニュータウン 27春日作遺跡					2					2	
25	東南部ニュータウン 伯父名台遺跡			1	1						2	
26	東南部ニュータウン 城ノ台遺跡					1	1				2	
27	千原台ニュータウン 草刈遺跡C区					1	1				2	
28	千原台ニュータウン 草刈遺跡E区					3					3	
29	千原台ニュータウン 川焼台遺跡			2	5	4					11	
30	合計	0	0	26	45	24	6	1	0	0	102	



5) 榎作遺跡 (第7図)

千葉市赤井町に所在する。千葉市の南西部に位置し、村田川の北側で千葉市の中央を流れる都川との中間地点の台地上に位置している。本遺跡は古墳時代前期から始まり5世紀末葉にピークを迎え、10世紀代まで展開する。竪穴住居跡は237軒である。5世紀末に54軒の竪穴住居がみられ、これを最大に6世紀から7世紀にかけての集落は、25軒前後の竪穴住居数で推移し、比較的安定した状態である。

東北系土器の出土は少ないが、3件の竪穴住居から各1点ずつ認められる。時期的には6世紀後半に3点、7世紀前半に1点である。

6) その他の遺跡 (第8図)

上記以外にもいくつかの遺跡で東北系土器の出土がみられる(表1)。ここでは図示するにとどめるが、時期的には6世紀後半に突如として姿を現し、7世紀前半をピークとして7世紀後半頃に終息するようである。また、分布地域はやはり九十九里沿岸の現山武郡地域及び千葉市南部から市原市北部にかけての地域に集中する傾向が強い。

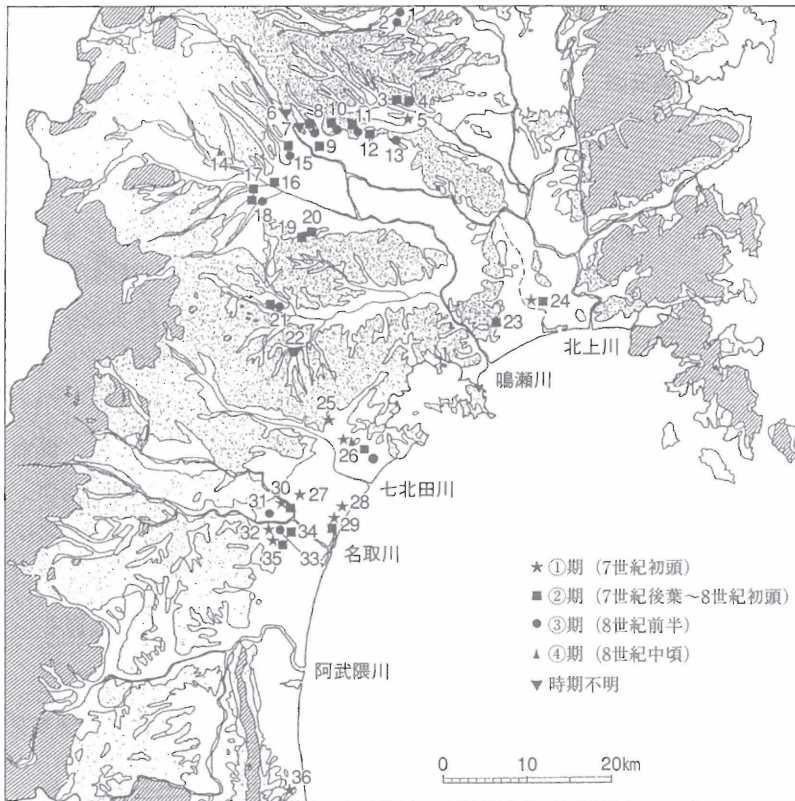
4. まとめ

これまで紹介してきたように九十九里地域以外にも千葉市、市原市にも多くの東北系の土師器が出土していることがわかる。しかし、器形の差というものはそれぞれの地域間では見受けられない。

栗焼棒遺跡でも指摘されているが、稜線を持つ在来の須恵器模倣の土師期との違いを明確に区別しにくいもののあることも事実である。器形的に東北系であろうと判断できるものはあるが、在来のものも内外面黒色処理であるし、最終調整はヘラミガキであるため器形が微妙な場合、差異の判別が困難である。

時期的変遷をみると6世紀後半から始まり、7世紀前半をピークとして7世紀後半まで多く作られていることがわかる。ここで問題となるのが栗圀式土器との関連である。

栗圀式土器は7世紀が始まりとされており、房総で6世紀の後半にみられる土器をどのように解釈するかである。いくつか例を挙げると、6世紀後半の比較的古い時期に該当する中永谷の100号住例は典型的に東北系の影響を受けていると思われる。有吉北貝塚や榎



(村田晃一「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学』第2号 2000年より)

第9図 関東系土師器分布図

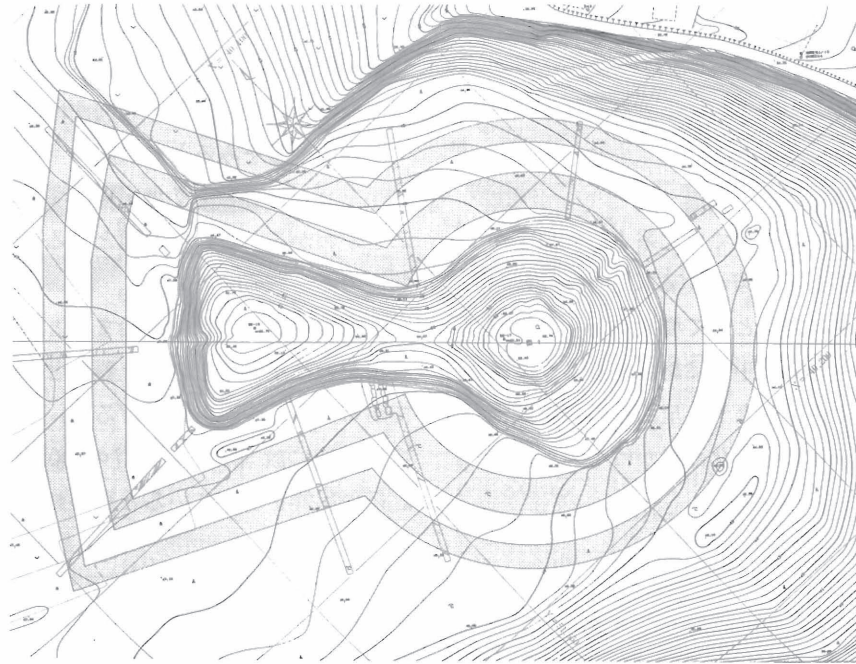
No	遺跡名	種別	時期
1	御駒堂遺跡	集落	③期
2	山ノ上遺跡	集落	③期
3	大境山遺跡	集落	②期
4	民生病院裏遺跡	集落	②期
5	泉谷館跡	集落	①期
6	川北横穴墓群	墳墓	不明
7	日光山古墳群	墳墓	不明
8	新谷地北遺跡	墳墓	②・③期
9	南小林遺跡	官衙	②期
10	宮沢遺跡・三輪田遺跡・権現山遺跡	城柵・寺院・集落	②・③期
11	朽木橋横穴墓群	墳墓	②・③期
12	日向横穴墓群	墳墓	②期
13	新田柵跡・八幡遺跡	城柵・集落	③期
14	東山遺跡	郡家	④期
15	名生館遺跡・上代遺跡	郡家・集落	②・③期
16	地藏車遺跡	集落	②期
17	蝦夷塚古墳群	墳墓	②期
18	色麻古墳群	墳墓	②期
19	青山横穴墓群	墳墓	②期
20	山畑横穴墓群	墳墓	②期
21	一里塚遺跡	官衙・集落	②期
22	原前南遺跡	集落	③期
23	矢本横穴墓群	墳墓	②期
24	赤井遺跡	官衙・集落	①・②期
25	八幡崎B遺跡	集落	①期
26	山王遺跡	集落	①~④期
27	南小泉遺跡	集落	①期
28	藤田新田遺跡	集落	①期
29	下飯田遺跡	集落	①・②期
30	郡山遺跡	城柵・官衙・寺院・集落	①・②期
31	六反田遺跡	集落	③期
32	栗遺跡	集落	①期
33	中田南遺跡	集落	②期
34	中田畑中遺跡	集落	②期
35	清水遺跡	集落	①・②期
36	狐塚遺跡	集落	①期

作遺跡の例も6世紀後半でありながら東北系である。

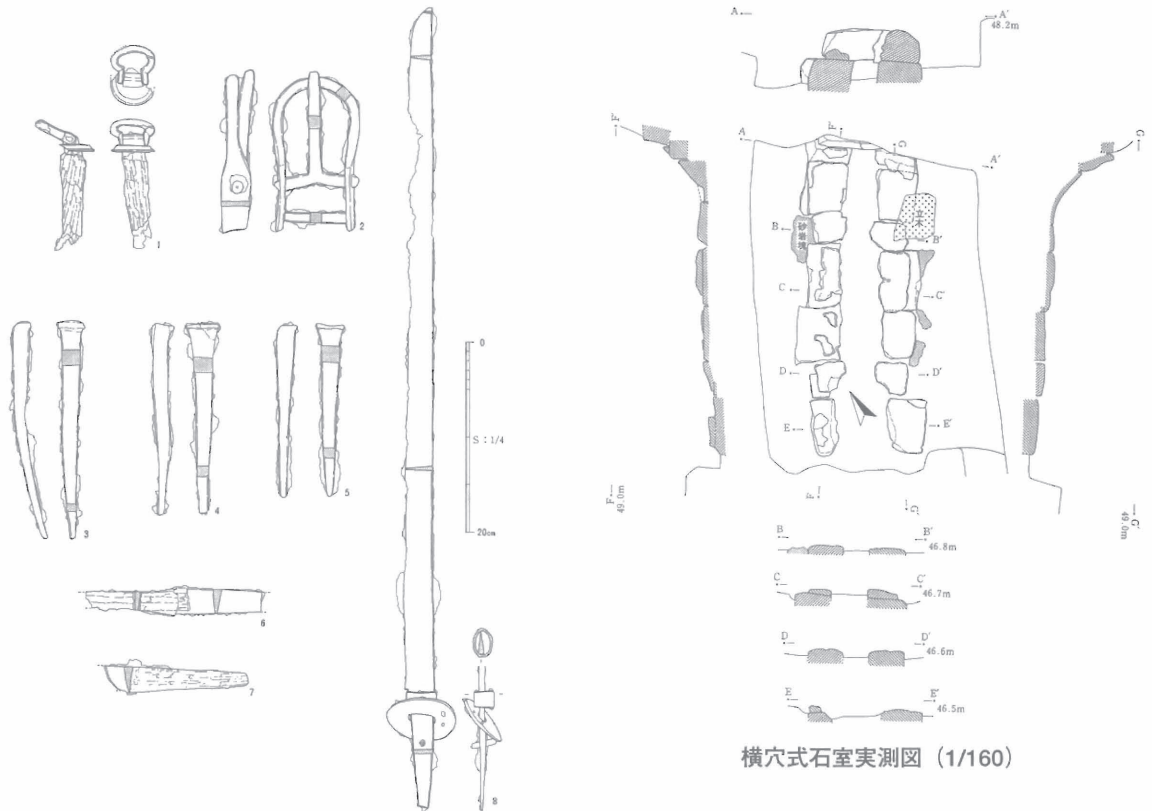
時期的に栗罎式土器より県内の東北系土器が時期的に先行するという要因のひとつとして、東北地方のこの時期の土器編年が不確定であることもあるが、栗罎式に先行する住社式からの影響も可能性として考えられるのではないだろうか。本来、栗罎式土器は内面黒色処理であって、外面は施されず、調整も房総の全面

丁寧なヘラミガキは行っていない。未だ、東北本来の土師器は出土していないことから、東北系土器の出土は、土器そのものの移動ではなく人の動きによるものであると考えられる。

前述したとおり7世紀後半から8世紀中頃までには律令国家の政策として多くの柵戸が東国から移住させられ、その結果として関東系の土器が東北地方で出土



墳丘及び周溝復元図 (1/1200)



横穴式石室実測図 (1/160)

第10図 Aトレンチ内側周溝内出土の金属製品 (1/4)



している。(第9図)しかし、強制的ではないそれ以前の両地方の交流があったことも否定はできないのではないだろうか。

東北地方、特に陸奥国との関係については、古代史の観点から指摘されているが、文献の記載されている史料は奈良時代以降であり、その前時代の動向については、考古学的な面からアプローチしていかなければならない。

房総と東北との古墳時代後期の文化の交流を示すものには、本稿で取り上げた東北系土器以外にも、横穴の形態や古墳出土遺物などにみられる。特に、福島県浜通り地方から宮城県にかけての横穴と武社国造地域の古墳及び出土遺物に共通のものをみることができる。浜通り地方にある複室構造の横穴と金銅製品の組み合わせは、武社国造地域にある古墳の組み合わせと類似するものがある。

なかでも、山武郡山武町に所在する胡摩手台16号墳から出土した直刀が注目される(第10図)。胡摩手台16号墳は、太平洋に注ぎ込む作田川の支流である境川中流域左岸の台地上に位置する胡摩手台古墳群に含まれる。主軸長86mを測り、周溝が二重に巡る大形の前方後円墳である。石室は、墳丘南側のくびれ部付近で確認されており、軟質砂岩を用いた複室構造を示している。石室内からは、馬具や直刀、鉄鏃などが出土しているが、その中で、鏢の棟側に2つの孔をもつ直刀は、千葉県内では、ほとんど類例を見ないタイプである。萩原氏が報告書の中で触れているように、このような形態の鏢を有する直刀は、東北地方に類例がみられるようである。

今回は資料紹介を中心に稿を進めたが、今後、東北地方と房総とのこの6世紀後半から7世紀にかけての関係をもう一歩踏み込んで考えていきたいと考えている。

## 謝辞

今回小稿にあたっては、小林信一氏からは東北系土師器についてのご意見をいただき、また、栗田則久氏には全般にわたりご指導を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1 今泉隆雄 『地方史研究』第39巻5号 「八世紀に前半以前の陸奥国と坂東」 1989年
- 2 氏家和典 『歴史』8輯「東北土師器の型式分類とその編年」東北史学会 1957年

- 3 加藤道男 『考古学論叢Ⅱ』「宮城県における土師器研究の現状」 1989年
- 4 志田諄一他 『古代の地方史』5 坂東編 朝倉書房 1977年
- 5 関口功一 『歴史学研究』6 「日本古代の「移動」と「定住」」 1988年
- 6 村田晃一 『東国土器研究』「宮城県における6・7世紀の土器様相」東国土器研究会 1995年
- 7 工藤哲司他 『栗遺跡』— 栗閉式土師器標式遺跡調査報告書— 仙台市文化財調査報告書第43集 1970年
- 8 加藤・阿倍 「観音沢遺跡— 東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」 宮城県教育委員会 1980年
- 9 小井川・小川 「御駒堂遺跡— 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」 宮城県教育委員会 1982年
- 10 齋藤彰裕 「住社遺跡」 角田市文化財調査報告書第19集 1997年
- 11 滝口 宏 「東金台遺跡Ⅱ」椎木台遺跡・東金黒田遺跡・天王遺跡・小油井台遺跡(助経南文化財センター) 1998年
- 12 萩原恭一・小林信一 「東金市久我台遺跡」(助千葉県文化財センター) 1998年
- 13 平岡和夫 「東金市作畑遺跡調査報告書」 作畑遺跡調査会 1986年
- 14 加藤修司・永塚俊司 「千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—山武町栗焼棒遺跡—」(助千葉県文化財センター) 1997年
- 15 宮重行 他 「千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書—松尾町大山遺跡—」(助千葉県文化財センター) 2002年
- 16 小林清隆 他 「大綱山田遺跡群Ⅱ」一本松遺跡・円坊遺跡 (助山武郡市文化財センター) 1995年
- 17 渡辺修一 「大綱山田遺跡Ⅲ」猪ヶ崎遺跡 (助山武郡市文化財センター) 1996年
- 18 渡辺修一 「大綱山田遺跡Ⅳ」宮山遺跡・南前野遺跡 (助山武郡市文化財センター) 1997年
- 19 社 義則 「清水No.1遺跡」清水台No.1遺跡遺跡発掘調査会 1980年
- 20 稲見英輔 「油井古塚原遺跡(丑子台1,028地点)」(助山武郡市文化財センター) 1997年
- 21 千葉県東金市油井古塚原遺跡群 山武郡市文化財センター 1995年
- 22 栗本佳弘 「東南部ニュータウン5有吉二次遺跡」(助千葉県文化財センター) 1978年
- 23 栗本佳弘 「東南部ニュータウン6椎名崎遺跡」(助千葉県文化財センター) 1979年
- 24 岸本雅人 「東南部ニュータウン20有吉北貝塚(古墳時代以降)」(助千葉県文化財センター) 1998年
- 25 島立桂・蜂屋孝之 「東南部ニュータウン27千葉市春日作遺跡」(助千葉県文化財センター) 2003年
- 26 高田博・白井久美子 他 「千原台ニュータウンⅣ中永谷遺跡」(助千葉県文化財センター) 1991年
- 27 小林清隆 「千葉市榎作遺跡—千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ」(助千葉県文化財センター) 1992年
- 28 萩原恭一 「山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書」(助千葉県文化財センター) 1995年